

ふり出てそなくは俗にはり上て鳴といふにひとし昔は常にふりてよといひし也

○遠鏡に戀シイ人ヲ思ヒタシタ時ニハ聲ヲアケテサワシヤクワイノといひさて云此歌はもはら戀の歌なるをこゝに入れるはいかにそやといへるは非也こは時わりて物をも人も思ひ出る事あるを常磐山の枕として次にも思ひ出るときは山の岩つゝしなといへり此思ひ出る時は昔より歌の心と思へるはひか事也然きたかへるよりこの歌は更にもいはす後なる戀の歌なといかにとも聲えぬ事となれるもの也委く其所に辨せり今も戀しき人を思ひ出る事と思へるより是さへ戀の歌と意得てこゝに入れるをいふかしみたるは古説によれるの謬也これを打開に時鳥の妻こひしく思ひ出る時とせるはいよく陳妄也

聲はしてあみたは見ぬ時鳥わがころもてのひつをむらなん

是は梢など飛わたりて啼を見つゝよめる也さらてと泪は見えぬといふへきにあらずこの鳥大方はとひかけりてやすらはぬものなれと又とよまる時は時うつるまてもありて日ねもすも鳴くらす物也萬葉なとにもさる氣色をよめるそ多き

足曳の山ほどよきすまりはつてたれもまるとねをのみう鳴

こは山のしけみのをちこちにこゝらよりはへなくを鳴くらふるさまはきよてよめる也山とよめて鳴聲けにしかるもの也をりはへのはへは心はへなとのはへにて居る事とささす大よそにいふ語也さるは房延（ひらひ）の意ならんからに其延を長居するやうの意にとる事なかれ時鳥の上にていへけをは梢なにととまりぬるやうの意をりはへはそこら立さらぬといふはかり輕重のけちめある也もとはへの言はとひ

はみともいひ轉してはまひなひらひなど續くさゝくに活用すといへとも本の意はたかふへからす引延る方より語勢よわりて其こゝろ替らくのみ即ち心はへは心のやうすといふにてささ心とさすとはいと輕さか如きを推して知へし委き事は外にしるせり

○餘材にたれかまさるとよは時鳥の物おもふ人にくらふるやうになく心也といへり打開遠鏡等これに隨へる共に非也其物思ふ人の上をもいはすしてたれかまさるとのみいひて然きこゆへきものならんや誰かといへるか人めきて聞ゆるより思ひまをへるもの也孰れまさるといふにいなゝかまかはらざる事にてさるを誰かといへるかおもひまされは是は聲くらへをする心にて悲しみて泣の意にあらず又遠鏡にをりはへは時延にて時長くつゝく事といふ詞也といへるも非也もをるといへるはそこにとよまるの意なればおのつから時うつる方になれるものからこの延の語に時うつる意あるには非す又をりは時の意にとあらざる事など本注に辨せるか如し

今さらよ山へつゝるな郭公こゑのかきりはわかやとになけ

みくよのまも

やよやまて山ほどよきすつてん我よの中にすみ佗ぬとよ

歌の意明らかし

○遠鏡にワシハモウ世ノ中ニ住アソクワイノといへるは非也是は我世中に住むひぬと言傳んと末より三句にかへる也とよのよはよと呼かけていふこゝろにて初句のやよのよを再いひかへす意也とよをワイノと解ては言傳んどかへり合さるもの也さるを打わはせんとしてサウ云テタモの言とそ

へたれと此一首然ゆるひて余意を疑すの語勢にあらす又サウ云てタモはことつてんと同意なるをや
寛平御時きさの宮の歌合のうた 紀 友 則

さみたれに物思ひをればほととぎす夜ふかく鳴ていつち行どん

物おもひをれと夜ふかく鳴てと打合ふ也さて然鳴ていつちゆくらんと云流すにてものれもひをれはい
つち行らんと結ふにわらぬを辨ふへしさみたれはひたすら雨の名のみには非す多分時候をさしていへ
り六帖の雨の部に春雨夕立時雨とつゝきてさみたれの歌はなしこれ打まかせたる雨の名ならぬは也
今其頃はひをさしてつゆと云にわたれりこれもふる雨の甲をさしてのみいふならず大やうものゝしめ
らひ辟めくよりの名なると同じ後拾遺に五月雨は美豆の御牧のまこも草刈はすひまもあらしとと思ふ
とある歌の初句を解わつらひてさみたれにはのをはふけるものと意得たかへるも古に晴き也これ
雨やまぬ五月頃はといへる意にてきと雨のみをさすにあらす春雨には夕立にはといふへきを春雨は夕
立はとのみ云て聞ゆへけんやは拾遺にさみたれは近くなるらしさみたれはいこそねられぬなどある同
し意也只雨とのみ見ても事なき歌あるに付て思ひわく人なき也後撰にこの頃はさみたれ近み時鳥思ひ
乱れて鳴ぬ日そなき五月雨にはるの宮人くる時はほととぎすをや誌にせん五月雨になかめくらせる月
なればさやかに見えす雲かくれつゝ六帖に五月雨と事なしひつる時しもそ人に初の花は咲ける此等み
な只五月といふ方にかゝりて雨をせとせるにあらす又明恒集に郭公なく五月雨のみしか夜は月かけさ
へそともしかりけるさみたれのをかれとさきの月かけのおほろけにやはわか人をまつ五月雨の月のは
のかに見ゆるよは時鳥たにさやかにをきけ順集に身をつめは物おもふらし郭公なきのみまといふ五月雨

の暗など猶察るにたへすこれら春雨の短夜春雨のたそかれ時春雨の月春雨の暗などいふへきにあらさ
るをれもふへし

夜やくらき道やまどへるほどさす我宿をしらすきめてになく 大江 千里

ちどりせし花橋もいれなくになどほととぎすこゑたひぬらん きのつらゆき

夏の夜のふすめとすれば郭公なくひとこゑにあくるしのゝめ

初句原本に夏のよはとあるを正しき密勘にも同心のよし宜へり夏のよのとあるはいかにすとも聞えさ
る事也もとより寛平后宮歌合に夏のよはとあれは異論更になき事なるをこは管万の本に一たひ書わや
まてるより六帖に是をうつつつき〜子細あるへう思ひなりて此集をさへいろへるもの也と知へしし
のゝめは明るといふの枕詞にて戀の部にもしのゝめのはから〜と明ゆけはなどふるさすかたに見ゆ
れば萬葉に稻目明去來理とよめる同じ意の枕にて並ひ用ひたるへしいなのめは無之目也しのゝめはし
なひたる目にて即ちいねてふまける目をいふ其いねてしひたる目は必わくものなればわくの枕とせる
也當時も兼輔集にしのゝめのわけくれ君は忘れけりいふともわかぬ我を悲しき信明集にしのゝめのわ
けさうしかは夜もすからまきの戸よりと立かへりにしなどありさて其明るは夜の明ゆくにのみ大やう
つかひならせるうへに寐たる目てふ枕の心もしたしきよりつひにしのゝめを明方の事とも當時よむ事
になれりし也なるは玉垂は替の枕なるを小籠につかひならせるより垂の語もゆかりありけなればつひ

には玉垂を簾の事によみなせる類也さはいへ此寛平延喜の頃はたのかむきくによみて明方にきよ
 み或は古へを守りて只あくるの枕にのみつかふもあめりを見ゆ今も玉垂を簾にもよみ又古へにつきて
 枕にのみ用ふるもあるか如し此後享子院の歌合に頼基しのよめにおきて見つけは櫻はなまたよこめて
 も歌にける哉とよめる判の詞に此右の歌を見かどのおほせられけるやうねめをするくはなをみけむ
 どお行へいふにやどのたまはすればさたかたのあそんのほるのあそむのよとこすかたにどおほゆれど
 そうしければ御こきよにてさらはとてちになさせたまふなりと書れたり此判の心を按ずるに歌ぬしの
 心しのよめを明かたの事によみすゑたるをかのもの心になかひたるをもとかしみ給ふ御心よりしら
 すかほにやはう枕の意の寐たる目にして寐はけたる朝目をすりく打見けんし宣へるを定方
 朝臣昇朝臣の阿卿けにこれ仰のまぐ夜床姿にこそおほえ奉れと打合せてあされ姿し給へれと却て
 興有などありて持になされたりと云心也これにても當時のしのよめのふりを推はかるへし此文の内
 行へいふにやと御こきよにてとめる二所さらによみ得かたけれど今は大やうの心はへを引すへて解試
 み侍る也さて紀氏の鳴一聲に明るしのよめは此頼基の歌にひとしく明方の事に打まかせてよまれたる
 也やかて享子院有心無心歌合に棚はたの我にあふ夜のしのよめのみえぬはかりそ薄はふらまし後撰に
 しのよめにわかつて別し袂をそ云などあつるもみな明方の事也されと此ころまでは枕のねたる目の心を
 ふみてあくとか見るとかいひて目の縁とは離れざりし也後にいたりては全く明方の事となりて即ち顯
 注にしのよめとは曉と云と書れたり

○遠鏡に初句のの文字とかの意にて結句の明るへつゝ詞也といへるは非也鳴一聲に夏の夜の明る

しのよめと云てよからんや又初句より結句にしかつゝわらんやはされは然はきこえさる事也又
 云郭公ノナイタ一聲テ目カサメタカハヤモウ夜カアケルしのよめを打聞の如くおしたの目とする時
 は後の譯也といへるも非也是はいねたる朝の目のさめたるを明るしのよめといへりと見たるにや
 らは只わくしのよめといふへしあくると云るは夜の事にて目の上にはいはれず聞知へし又或説に夏
 のよはと云へさやうにきこゆれとのよめはそしのよめまで心たやますいみしく一首郭公をせんと
 せずして短夜をよみふせたる心は見ゆるとといへるも非也夏のよはと云くとも短夜をよみすゑたるを
 はいかて妨くへさ又心もいかつてたゆむへさ却て短夜の心いみしさものをや足みな傳寫の誤をしらす
 解えられぬを強て解んとせるの妄説也

みふのたよみぬ

紀 秋 岑

くるよめと見れば明ぬる夏のをあめすとやなくやま郭公
 夏山にこひしき人やいりにけんこゑふりたてよなくほとよきす

先打まかせて山に入といふ事は出家遁世して佛理に歸するをいふ當時神儒の名家といへともかたはら
 修信せざるなれば道俗とも心ある限は只此道を終のよるへとたのむ習ひなるよりさる方の離別世に
 多くて其冥蕪の歌踏樂にわまねしこの歌も夏山に打わけて鳴時鳥の悲しさこそをさよて彼四月の結夏
 安店をたよりに世をのかれ入る人を戀しむ人の歎きに思ひよせて郭公の戀しき人や山ももりしけん
 よめる也菅萬にも此歌に合せて一夏山中驚耳根郭公高響入禪門とあり又六帖に我ために何のわたこの

山なれや戀しと思ふ人の入らんなどよめる引合せて思ふへし

題しらす

よみ人しらす

ころの夏なきふるしてし時鳥うれのあらぬものもはらぬ

ほろ／＼きすの鳴をきよてよめる

つらゆき

五月雨のうららもとよろに郭公なにぞうしとめよた／＼なくらん

ちむらひにてまのこともをさけたうへけるにめして郭公まつ歌よめと有けれ

よよめる

みつね

ほろ／＼きすこゑもきこぬす山彦は外になく音をこたへやはせぬ

酒たうへなとあるは月あもしろき夜なとなるへししかれば上にも時鳥まらわたらせ給ふよりわざを
出てまつ歌おほせ付られたる世更にこよひ一際もさこえずやよいか山彦はよそなるひくさも傳ふる
ならずやかかふる今夜外にてたに鳴さらんや其外になく音をたに答てこゝに聞え奉れいかて答へやはせ
ぬ畏くもしか待わたらせ給ひて尋常の夜ならぬをささるへき方の山に向ひて山彦へよみくたしたる意
はへ山彦は今のこたまにて物の聲にこたへて生懸あるに似たれば日子の名を付たる也日子は往古よ
り男子の通稱也後にこの山彦に對へて山姫の名も出たり

山にほろ／＼きすのなきけるをきよてよめる づらぬき

郭公人まつやまになくなれば我うらつけに戀まざりけり

はやく住ける所にて郭公のなきけるをきよてよめる

たみね

むめし／＼や今もこひしきほど／＼きす故里にしもなきて來つらん

郭公のなきけるをきよてよめる

みつね

時鳥われとはなしに卵のえなのうき世中になきわたるらん

郭公の殊更に山より出て世中になくをいふ空をなきわたるを年月已か啼て世をわたるになそらへる也
時鳥の上を云んとて己をしはらくやとひ出せりもとより己れをほうき身に極めかた付て只主意は時鳥
のさまを云くたせるのみ同人秋の部に雁をきいて愛事を思ひつらねてかりかねの鳴こそわたれ秋のよ
なくと云るは似たるおもむきながらこは雁によせて専ら已か上をのへたるにて今どは眞主のたかひ
あるを辨すへしうの花とうきと云ん枕のみ萬葉集十卷之徳宗御根乃宇能花之應事有時鳥之不寐也
るによれる物から其卵花之時にわはせて時鳥の匂ひとなすか當世の序のさま也

○違鏡にトウイフ事テ世中カウイト云テ卵花ノアタリへ來テアノヤウニオレト同シヤウニ鳴テグラ
ス事ヤラと云ると非也卵花の只うといはん枕なる事萬葉によりても明らけさをや卵花のあたり
來て時鳥の鳴くらす事とねもへるはをさなしさては世中に鳴わたるらんといふけしきにも詠詞自然
にかなはざるもの也

はちすの露を見てよめる

位正遍昭

はちす葉のほりにしまぬ心もてなにかハ露を玉とあさむく

つゆのつはひとつふたつなどのつにてもどこをやかに散あるの名也言葉卷十三露葉之遺葉露存有之
往方無同卷十六遺葉露存有玉乃玉爾似將有見など有て露葉のつく大きく玉をなせるをはそのかみ只本
と云て露とはいはす六帖に遺葉にれきある露の玉水はうかへる人の心とをみるさあるも露あつまりて
玉の水をなせる也其たゆたふさまをうかへる心どうけたる枕と知へし今もさる露をれきたためて固か
やく玉と造りなせるを遺葉の清潔なる心をもていかてかくはたはかり欺くをといふ也常に露を共ま
玉と見るとはたかへり露を玉となしてあさむくの意也心もてといひ何かはあさむくといへるにしか巧
みなすの意はへ見えて力あるを味ふへし彼の今も其わいためをすへしと云には非ず此歌はさるおもむ
きあるを見すくす事なかれといふ也交葉に荷露露圓登是珠といへるも露あつまりて一圓珠をなせる
を云り

月のれもしろかりける夜あつつきまたによめる ふゆやふ

夏のよはまたよひなみらあげぬるを雲のいつこに月やどるらん

是は納涼の歌にてすゝみ明したるさま也されは夏の末に入たり月は照なからほからかに明ゆくけしき
今も向へる心ちをする夏の夜はかく宵のまに明果ぬるを月は雲のいつこにか隠れやどるらんと云り己
かゆくりなき意より月もいかにわけてんすらんされはつかなみたるかはかなく面白き也

○餘材に今宵の空はまた宵にて明れば月も常のとまりにはえいたらすして半空にやどりてそいませす

ちんぞおもひやりてよめる也打聞に月のわたるはほどはかりあらんに宵にして夜の明るなれば月は
いつこにやどりて有らんといへる共に非也方の面白かりける夜曉方によめると云るは見るく明せ
る納涼のさま也かく月入て後起出で空などうかくひ見たるやうのけしきならんやは

○遊鏡にア、ヨイ月テアツタニ云く西ノ方ノ山マテイキツク開ハアルマイカアノ院ノ雲ノトコラニ
トマツタ事ヤラと云るは非也是もいさつくまは有まいとこらにとまつた事やらなどおほめきたるは
其よき月を見さして一たひ打臥たるさまに思へるにや詞書にたかへるはいふも更也この雲のいつこ
は空のいつこといふにてかくれやどらん雲など立まふへき夜のさまならぬを聞知へし餘材に雲のい
つことは露は物をへたて隠すものなればいへり只いつこの空にかと云心也といへるとかなへり畢竟
昔荷説にはかられたるの隠也

となりよりとこなつの花をこひにねこせたりければをしみてこの歌をよみて
つみはしける みつね

ちりをたにすゑしどう思ふさきより妹とわかぬる床夏のはな

妹どわれと二人ぬる床夏なれば露をたにかけしどおもふを手折てさへ人に見すへきやしか露そかなる
花にはあらずといふかく惜む心を共まといひつかはしたるは隔てぬ中らひのたはわさ也此歌の心遊鏡
とさ得たりと云へしさて端詞は歌のおもてに隨ひて替たれどまことは花をもつかはしたるへしいつく
より乞んも同じかるへきを殊さらには隣よりなるをことわれるは其隔てなき中をしらせたる也されはと
しみて此歌をよみてとのみありて其花をつかえずとはなれば帯みながらよみそへてつかはせし心下

にみゆと云へし六帖に同人熱どわかぬる盛夏の花なればなへて人にはみせん物かはとあるはこの歌なるへし此集えらするも時節なる方にならざればならん集中此類しこと盛夏の名に思ひよせて熱とぬる床なれば大よそ人に見ずへきならずと只其ゆつる心の苦しきをいひて折てやらなくをしきを見せし也今は其床に體を思ひそへ其體たにすゑしと思ふを人につかはすへきならずと今一層の心を加へられし也されど其願をいはんとする方に引れてなへての人には見せしといふはしめの主意はかたはらになりてよくせずは然は聞どり難きまてなれり六帖のは打つけのまゝをれば下ゑみのたは心まてあらはに見えて中よかかしき方も侍るにや

○餘材に夏を本として常夏の詞はあるかと思ふに只常にと云心にや萬葉第十七家持立山賦にに川のその立山にどこなつに雪よりしきて云と有といへるは非也常夏は夏咲てより秋冬までもあれは然いそんは夏也立山の雪も夏あるをゆつらしむより夏を主にして常夏とは云る也萬葉中常夏の詞みなしかり常にといふ心をいかにて常夏とはいふへき

みな月のつこもりの日よめる

夏と秋どゆきかふ空のかよひちはかたへすしき風やふくらん

みな月はもとより熱暑にかれて水なきの名也水なき河をみなせ川など云に同じさる水無月のつこもりいどあつき日しもあすみん秋のふん月也とさくに今夜しか秋と夏と行かは、其秋の立くらんかたへはやかに涼しき風や吹らんと秋涼をまらわふるこゝろよりくれなん空をしかもおもひやれる也

○遊鏡に云今晚クレテユク夏ト來ル秋トイキチカウ空ノ通り道ハソノ夏ノ通ツテユク片一方ハマダ

暑ウテ秋ノトホツテクル片一方ハス、シイ風カフクテアヲウカイと云るは非也此歌は只涼しきをのみねかひて思ひやりたる炎熱の情思ふへし夜といはて日とあるにも心を付へしされど暑と方に之其意なければ片一方ハマダ暑ウテの一句不用也しか引どりたる釋解に例せば最初にア、暑イ事故などねきて末の余意に其涼イ風カコ、ニモハヤクフイテコイテとか何と有へし只秋夏交替の上とことわりたるものと思へるは其意を得ざるものにていはゆる歌をとさころすの罪のかれざるに似たり

古今和歌集正義卷第三



